

# オンライン交流の課題

－ 追手門学院大学とハノイ国家大学外国語大学の取り組みを事例に－

藪 崎 淳 子

## A Reflection on an Online Exchange Program Conducted by Otemon Gakuin University and University of Languages and International Studies Vietnam National University, Hanoi

Junko YABUZAKI

### 1. はじめに

本稿は、2020年度秋学期に行った、追手門学院大学とハノイ国家大学外国語大学とのオンライン交流（以下、「本交流」と呼ぶ）を踏まえ、オンライン交流の方法について報告・考察するものである。

2020年は新型コロナウイルス感染症の蔓延により、留学したり、留学生を受け入れたりすることが難しくなり、その状態は2021年秋となる現在も続いている。そうした状況の中、学生たちの学びを止めず、以前と同様の学習の機会を如何に設けるのが課題となっている。その課題解決の方策の1つが、ICTの活用である。Web会議システムが、会議や授業、課外活動などにおいても活用されている（岡田2021）。また、「COIL（Collaborative Online International Learning）型教育」と呼ばれる海外の教育機関と連携したオンライン授業が話題になるなど<sup>1</sup>、海外とのオンライン交流も活発に行われている。もちろん、2020年以前にもICTを活用した海外の大学との授業・交流は行われていた（小林・何2014、植田2016、齋藤2016、中俣2016など）。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、海外の教育機関とのオンライン交流の需要はこれまで以上に高まっていると言える。このことは、JPN-COIL協議会に入会する機関が増えていることから見てとれる<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 朝日新聞2021年06月29日朝刊、教育1「海越え、つながるキャンパス 海外の学生とのコラボ授業「COIL」、コロナ下で加速」

オンラインで海外の人々と交流することが、外国語の運用能力・学習意欲の向上をはかったり、異文化理解を深め、異文化間コミュニケーション能力を高めたりする上で有益なことは、これまでの研究・報告などから明らかである。本交流も4節で述べるように、一定の学習効果をあげている。その一方で、本交流ではベトナム人学生の遅刻・欠席、そして離脱という問題も生じた。では、どのような点に留意すれば、こうした問題を回避できたのであろうか。本稿はオンライン交流における問題解決に焦点を当てることで、海外の教育機関とのオンライン交流における方法を考える。

## 2. これまでの研究・報告と問題の所在

海外とのオンライン交流に関する研究・報告はこれまでもある。それぞれ異なる方法を用いて交流を行っているものの、総じて言語の学習や異文化理解などにおいてよい影響があると論じており、オンライン交流が参加者に正の効果をもたらすことは確かである。しかし、交流が与える影響や効果を主眼とした研究・報告では、活動の詳細までは記述がなされていないこともある<sup>3</sup>。また、具体的な方法について記されている場合でも、交流による効果を主として論じているために、交流方法の是非については詳しく触れていないものもある<sup>4</sup>。そのため、どのような点に留意すればオンライン交流がより円滑に進められるのかは明らかではなく、また問題が生じた際に解決する方策も示されていない。

もちろん、交流の方法は、実施時期や参加人数、参加者の言語運用能力などに左右されるところも大きく、主催者・運営者には如何ともしがたいところがあるのも事実である。しかし、オンライン交流の策定に際しては、より良い学びの機会とすべく、選択可能な諸条件の中からより最適な組み合わせにしたいと考えるだろう。それには、交流の方法としてどのような選択肢があるのか、またそれぞれのメリット・デメリットが示されていることが必要である。こうした立場から、本稿は実際に生じた問題も取り上げ、オンライン交流の方法について考察していく。

<sup>2</sup> 2021年8月時点、JPN-COIL協議会には39の高等教育機関が正会員となっている。(https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/より 2021年8月13日アクセス)

<sup>3</sup> 齋藤(2016)では、オンライン交流参加者と非参加者を比較し、交流が動機づけにどのように影響するのかを考察したものであるが、交流の方法については、週1回×3ヶ月間、日本語による交流を授業外に行ったと記されているに留まる。

<sup>4</sup> 中俣(2016)は、交流の内容については詳述しているものの、交流において何ら問題がなかったのか、方法の是非についての検討はない。なお、植田(2016)には、Skypeの安定性やOneDriveによる継続的なデータ保管といったハード面に関する課題は指摘されている。

### 3. 交流の概要

本稿が参照する事例は、2020年11月から2021年1月にかけて、追手門学院大学とハノイ国家大学外国語大学との間で行われたオンライン交流である。交流会の参加者は、追手門学院大学において日本語教育人材を育成する「日本語教員養成プログラム」の履修者10名（以下、「日本人学生」）と、ハノイ国家大学外国語大学で日本語を学習する15名（以下、「ベトナム人学生」）、そしてコーディネーター役の本稿執筆者である。以下、交流の内容について説明する。

#### 3-1 交流の目的

本交流の目的は2つである。1つは、異文化を理解すること、もう1つは日本語運用能力に関することである。後者について、日本人学生は相手の日本語運用能力に応じて語彙や文型などをコントロールしたり、日本語学習者の発話を聞き取ったりする力を身につけることを、ベトナム人学生は日本語運用能力を高めることを目標とした。

#### 3-2 交流の方法

日本人学生2人とベトナム人学生3人を1つのグループとし、参加者を5つのグループに分けた。日本とベトナム、それぞれの文化について紹介する写真・動画を撮影し、5分程度の動画として編集するという課題を与え、グループワークを行った。なお、動画にはBGM、日本語とベトナム語による字幕、そして日本語によるナレーションもつけるよう指示した。各グループが選定したテーマは次の通りである。

【表1 各グループのテーマ】

| グループ  | テーマ         |
|-------|-------------|
| グループ1 | ベトナムと日本の大学祭 |
| グループ2 | ベトナムと日本の行事  |
| グループ3 | ベトナムと日本の昼食  |
| グループ4 | ベトナムと日本の通学  |
| グループ5 | ベトナムと日本のおやつ |

テーマの選定に際しては、日本とベトナムの相似・相違が比較しやすい内容であるということに加え、新型コロナウイルス感染症が蔓延していることから、繁華街や遠方に出かけることなく、身近なところで写真・動画の撮影が行えるか、あるいは既に撮影した写真・動画が活用できるテーマを選ぶよう指示をした。

Zoom ミーティングを使用した全体交流会は、日本人学生が履修している「日本語教授法」の

授業時間内に計5回行った。初回冒頭には参加者全員で集まり、自己紹介や課題の説明を行ったが、それ以外の時間はZoomのブレイクアウトルームセッション機能を使ったグループワークを行った。各回の内容は次の通りである<sup>5</sup>。

【表2 各回の内容】

| 回   | 実施日   | 時間                             | 内容                                       |
|-----|-------|--------------------------------|------------------------------------------|
| 1回目 | 11/13 | 日 15:00-16:00<br>越 13:00-14:00 | 全体：オリエンテーション、自己紹介<br>グループ：テーマの選定と連絡方法の確認 |
| 2回目 | 11/20 | 日 15:00-15:30<br>越 13:00-13:30 | グループ：絵コンテを作り、必要な動画・写真について相談              |
| 3回目 | 11/27 | 日 15:00-15:30<br>越 13:00-13:30 | グループ：撮影した動画・写真の共有<br>BGMの選定              |
| 4回目 | 12/25 | 日 16:00-16:30<br>越 14:00-14:30 | グループ：字幕（日本語・ベトナム語）の作成                    |
| 5回目 | 1/8   | 日 15:00-16:00<br>越 13:00-14:00 | グループ：ナレーション（日本語）の作成と練習                   |

日本人学生は、「日本語教授法」の受講者でもあり、交流会の前後の時間は対面で当該授業を受ける必要があったことから、全員追手門学院大学のキャンパスから交流会に参加した。なお、他のグループの声によって交流に支障をきたすことがないように、日本人学生はグループごとに5つの教室に分かれた<sup>6</sup>。ベトナム人学生は、ハノイ国家大学外国語大学の先生が募集したメンバーで、授業時間外の活動であった。全員、午前中に開講されている授業を終えてから午後に行われた交流会に参加しており、ほとんどが自宅からの参加であった。コーディネーター役の本稿執筆者は、日本人学生とは別の教室から参加した。基本的にはZoomのメインセッションで待機をし、開始時間を過ぎて参加する学生をブレイクアウトルームに振り分けたり<sup>7</sup>、学生からの質問に応じたりした。また、適宜ブレイクアウトルームセッションに参加し、各グループの進捗状況を確認した。

なお、Zoomの他、グループワークにはLINEも活用した。LINEは、上記日程だけで終えられなかった課題についてグループで相談するために使用したり、写真・動画・BGMの共有に用いたりした他、課題とは直接的に関係のないことも含めたメンバー間でのコミュニケーションにも使われていたそうである。

<sup>5</sup> 本交流の企画・実施決定は、2020年度秋学期開始後、約1ヶ月経過した時点であったため、シラバスの大きな変更が難しく、また外部の教育機関の見学を予定していたこともあり、実施間隔、及び開催時間を一定させることができなかった。

<sup>6</sup> 小林・何（2014: 147）にも「同時に複数のチームが一斉に実践を行ったため騒がしく、「静かさが保たれる工夫が必要となる」とある。

<sup>7</sup> 学生の遅刻については5-2で詳しく触れる。

動画作成はグループによって進度に差があり、交流最終回に完成・提出したグループもあれば、全体での交流終了後、1ヶ月ほど経過して提出したグループもある。グループによって差はあるものの、いずれのグループも課題完成に至るまでには、LINEでの日常的なコミュニケーションも含めて、表2に示した以外の時間にも交流を行った。全グループの動画完成後には、Googleドライブを利用し、作成した5つの動画を共有した。また、動画の視聴結果も含めた交流に関するアンケート（Googleフォーム利用・任意）を実施した<sup>8</sup>。

#### 4. アンケート結果

オンライン交流の方法について考察するために、次節で本交流の問題点や課題に触れるが、その前に述べておきたいことがある。それは、本交流が当初の目的以上の学習効果をあげ、参加者に達成感を与えるものであったということである。

本交流の目的は3-1に述べたように、日本とベトナムの文化、及び日本語運用について学ぶことである。アンケートでは、本交流がこれらの学習に役立ったと回答されており、目的は達成されたと言える。また、アンケートには次のような記述も見られ、グループにおけるコミュニケーションスキルなど、当初の目的以外にも学んだことがうかがえる。

- (1) チームワークスキル、動画を撮るスキル、日本語スキルを練習の機会があります。  
(アンケートの自由記述は全て原文ママである。以下、同。)
- (2) 相手の性格や文化を理解してコミュニケーションをすることが大切たのだと気づいた。

また、課題として作成した動画に対する自己評価、プロジェクトに対する満足度も高いことが、次の自由記述から分かる。

- (3) 大変なこともありましたが、協力しあって一つの動画が完成した時、達成感がありました。また、お互いの国の事情や興味があることなどを沢山知れて面白かったです。
- (4) オンラインでの交流で、一緒に動画を作成するというのは、とても新しい交流の仕方だと思いました。不慣れなことも多く、うまくいかなかった部分もありましたが、その分、もう一度チャレンジしてみたいという気持ちもあります。離れていても、このような形で交流ができるのはとても素晴らしいことだと思いましたし、貴重な経験ができたと感じています。

---

<sup>8</sup> アンケートの詳細は本稿末尾に付す。

(5)このプロジェクトはとっても面白いです。色々なことを勉強になりました。

2節でも見たように、海外とのオンライン交流が日本語運用能力の向上や異文化理解を深める上で有益であることは確かである。しかし、正の効果だけではなく、問題点や課題を含めて検討し、その内容を公にすることが、今後のオンライン交流の質を高めることに資すると思われる。

## 5. 考 察

オンライン交流のあり方は次のようにまとめられると考える。

【表3 海外とのオンライン交流のあり方】

| 項目    | バリエーション      |              |              |                              |
|-------|--------------|--------------|--------------|------------------------------|
| 交流人数  | 1 人 対 1 人    | 少数 対 少数      | 多数 対 多数      |                              |
| 成果物   | 無            | 有<br>(発表)    | 有<br>(制作物)   |                              |
| 実施時   | 授業外          | 授業内<br>(片方)  | 授業内<br>(双方)  |                              |
| 評価    | 無            | 有            |              |                              |
| 教員の参加 | 無            | 有<br>(片方・一部) | 有<br>(片方・常時) | 有<br>(双方・一部)<br>有<br>(双方・常時) |
| 回数    | 複数回<br>(不定期) | 複数回<br>(定期)  |              | 1 回                          |

左端の項目は、交流会をデザインする上で考慮が必要な項目である。それぞれの項目は、右に示すようにいくつかのバリエーションがあり、項目ごとに複数あるバリエーションの中から選択したものを組み合わせていくことで、1つの交流のあり方が策定されることを示している。上から順に各項目とそのバリエーションを説明していこう。

「交流人数」は「1 人 対 1 人」のペアの他、グループによる交流がある。「少数 対 少数」と「多数 対 多数」の差は、前者が少人数のグループでの交流を、後者は双方の参加者全員が一堂に介するような多人数での交流を指す。「成果物」は事後アンケートなどとは別に、交流の結果を何らかの形にまとめるタスクを課すか否かを指す。成果物が有る場合でも、最終回にプレゼンテーションを行ったり、討論を行ったりするような「発表」タイプと、レポート執筆などの形に残る「制作物」を求めるタイプとがあろう。「実施時」については、授業時間内に実施したか否かによって分類している。「実施時」とは別に「評価」という項目を立てるのは、授業時間外に実施した交流でも、その内容が何らかの科目に紐づけられて評価される場合もあれば、実

施時間は授業内でも評価の対象とはならない場合もあるからである。「教員の参加」については、たとえば複数回の交流において、初回と最終回のみ参加するという「一部」の参加もあれば、毎回参加する「常時」が考えられる。また、交流する双方の教員が参加する場合と、どちらか一方の教員のみが参加する場合がある。「回数」については、「複数回」の場合、たとえば毎週決まった曜日の決まった時間に定期的に行われる場合もあれば、ペアやグループの都合に合わせて、開始時間が変更されるなど不定期の場合もあろう。不定期の場合には、事前にスケジュールが決められている場合もあれば、交流開始後にその都度決めていくという場合もあると考えられる。

なお、表3に網掛けしているのは本交流の実施方法である。本交流は複数回の開催であり、本稿が問題として取り上げる交流会参加者の欠席や離脱は1回のみの開催では生じないことから、以下では複数回開催について考察する。

結論を先取りする形になるが、交流のあり方を決めていく各項目のうち、「交流の人数」と「成果物」は交流の難易度に関わり、その他の項目は交流継続をどの程度支えていくのかに関わると考える。本稿の考えを表3に即して示すと、次の通りである。

【表4-1 海外とのオンライン交流のあり方と難易度】

| 項目   | バリエーション      |           |            |
|------|--------------|-----------|------------|
| 交流人数 | 1人対1人        | 少数対少数     | 多数対多数      |
| 成果物  | 無            | 有<br>(発表) | 有<br>(制作物) |
| 難易度  | 低い ←————→ 高い |           |            |

【表4-2 海外とのオンライン交流のあり方と交流継続を支える程度】

| 項目    | バリエーション      |              |              |                           |
|-------|--------------|--------------|--------------|---------------------------|
| 実施時   | 授業外          | 授業内<br>(片方)  | 授業内<br>(双方)  |                           |
| 評価    | 無            |              |              | 有                         |
| 教員の参加 | 無            | 有<br>(片方・一部) | 有<br>(片方・常時) | 有<br>(双方・一部) 有<br>(双方・常時) |
| 開催方法  | 不定期開催        |              |              | 定期開催                      |
| 支えの程度 | 低い ←————→ 高い |              |              |                           |

まず、表4-1を見よう。交流の人数は「1人対1人」から「多数対多数」と、相対する人数が多くなると難易度が高まり、成果物も「無」から「有（制作物）」へと難易度が高まる。一方、表4-2に示した項目は、交流継続を促したり、難しい局面をサポートしたりすると考える要素で、表の左端から右端へと、交流継続を支える程度が高くなる。例えば、「交流人数＝多数対多数」とし、「成果物＝有（制作物）」という交流会を企画したとしよう。この交流会は表4-1か

ら非常に難易度が高いことが分かる。この交流会に対し、表4-2の項目について「実施時＝授業内（双方）」、「評価＝有」、「教員参加＝有（双方・常時）」、「開催方法＝定期開催」と、交流継続を支える程度の高い条件を整えれば安定的な継続が可能となるが、「実施時＝授業外」「評価＝無」「教員の参加＝無」「開催方法＝不定期開催」という要素を選択すると、支えの程度が低いために難易度とのバランスがとれず、安定的な継続が難しくなる、ということを2つの表は表している。

以下、本交流の事例を、表4-1、表4-2に照らして見ていこう。

### 5-1 交流人数と成果物—難易度と達成感—

交流の難易度に関連する交流人数と成果物について、本交流を振り返りながら考察していく。

まずは、交流人数について見ていこう。本交流では、初回のオリエンテーション時を除くと、日本人学生2人、ベトナム人学生3人でのグループワークを中心とした「少数対少数」である。この点について、アンケートでは「主に話す人が決まってしまう」、「意見を伝える前に、他人の意見を聞いた方がいい」という否定的なコメントが見られた。また、「ペアワークにすると（中略）交流しやすいのではないか」との提案もあった。複数人での交流では、語学力や性格によって、会話のターンがとりにくく、思うように発言できない参加者もいることが分かる<sup>9</sup>。発話がしにくい傾向は「多数対多数」ではなおさらであり、参加者によってはファシリテーターが順に発言を促すなどしなければ、発話しにくい可能性もあろう。つまり、難易度という点では「1人対1人」が最も低く、参加人数が増えるほど難易度が高くなる。

次に、成果物と難易度の関係を考えよう。成果物は無い方が難易度が低く、有る方が難易度が高いと言えるが、成果物の中身に注目すると、今回の交流で実施した動画作成のような制作物を求める場合と、プレゼンテーションや討論のような発表を求める場合とでは、前者の方がより難易度が高いと考えられる。アンケートにおいても「大変なこともありました」「不慣れなことも多く、うまくいかなかった部分もありました」などというコメントが見られ、制作物を要求する課題は難易度が高かったことがうかがえる。

こうした難易度は達成感と表裏一体の関係にあることが指摘されている。若林、他（2020）は、「ある程度参加者にとって難しいと感じる内容である方が達成感をより高く感じる傾向がある」と述べている。本交流は、人数の面では中程度、成果物の面では高程度の難易度であったといえ、参加者にとってはやや難易度が高いと感じられる交流であったと推察される。しかし、その分達成感が得られたことは、4節(3)(4)に示したアンケート記述にあらわれている。で

<sup>9</sup> アンケートには「それぞれの人が自分の意見を話して、それから集める」と、参加者全員が話しやすい方法に関する提案もあった。今、他（2021: 6）にも「多数対多数のオンライン交流形式ではなく少人数のグループでの交流形式にして、必然的に会話をしなければいけない状況を作り出す必要がある」とある。

は、交流人数をさらに増やすなど、より難易度を高めたら達成感も高まるのかということ、必ずしもそうではなかろう。先にも述べたように、交流人数については「少数対少数」でも否定的な感想をもった参加者がいた。達成感が得られるようにするためには、容易ではないけれども努力をすれば完遂できる、と感じられる程度の課題や交流人数に設定することが肝要である<sup>10</sup>。

## 5-2 難易度の高さを支えるもの

交流参加者が挑戦可能な難易度に設定すれば、参加者全員が達成感を得ることができ、交流を成功させられるわけでは必ずしもない。本交流は総じて成功したと言えるものの、交流の安定的な継続という面では問題も生じた。

ベトナム人学生は、交流第1回目には2人の欠席者を除く13人が定時に参加したものの、2回目以降は遅刻する者も少なくなく、欠席者も度々見られた<sup>11</sup>。また、課題とした動画の末尾にはグループのメンバーの写真を添付するよう指示をしたが、指示通り写真を添付した4つのグループのうち、全員の写真が添付されていたのは2グループに留まり、残り2グループはともにベトナム人学生が1人欠けていた<sup>12</sup>。交流が終了した後に実施したアンケート（回答任意）についても、日本人学生は10人中8人が回答したのに対し、ベトナム人学生は15人中10人と7割に満たなかった。こうした状況はアンケートの自由記述にも次のようにあらわれている。

(6) オンラインということもあって、集まるのに時間がかかったり、動作が伝わりにくくて苦労したりした部分も多かったし、連絡がなかなか取れずにこまったこともあったけど異文化交流ができて、とても楽しかったです。（下線は、本稿執筆者による）

では、交流継続が不安定になったのはなぜなのであろうか。

この問いに対し、課題の難易度が高かったからではないか、また、課題に興味がもてなかったからではないかという見方もあろう。確かに課題は容易なものではなかったが、最終的に参加した5つのグループ全てが動画を完成させていることから、過度に難しい課題というわけで

<sup>10</sup> 大塚・遠藤（2019: 297）に、デジタルゲームにおいて「試行回数が多すぎると、ライトユーザーではゲームからの離脱に繋がり、コアユーザーでは成功が義務となり苦痛を感じ、達成感は失われる」とあり、難易度が高すぎると離脱や苦痛につながると論じられている。また、M. チクセントミハイ（2010: 42）に「チャレンジとスキルが高いところで一致」すると、「ふつうの生活から離れたフローを提示してくれる」とあり、「チャレンジ」は高すぎても低すぎても適当ではなく、「スキル」によってちょうど処理できる程度が望ましいことが分かる。

<sup>11</sup> ネット環境のために音声や画像が途切れ途切れでグループワークに上手く参加できない学生や、回によってLINEでのみ参加している学生がいるなどしたために、Zoomのメインセッションにいた本稿執筆者にはベトナム人学生の正確な出席確認は行えなかった。

<sup>12</sup> 残り1グループについては、日本人学生から、グループのメンバー全員が最後まで課題に取り組んだと報告があった。

はなかったと考えられる。また、ベトナム人学生の募集は、交流の内容・方法を示した上で行われており、交流について理解した上で参加したと考えられる。各グループのテーマ選定についても、日本人学生がリードしたところがあるとは言え、グループで決定したものであることから、これが直接的な原因になったとは考えにくい。また、これらが原因であれば、日本人学生にも同様の問題が見られてもおかしくない。しかし、日本人学生は1人も欠けることなく、全員動画の完成まで参加している。では、本交流における日本人学生とベトナム人学生の差は何であったのか。表4-2から見られる両者の差は、①全体での交流時間が授業内であるか否かと、②教員参加の有無である。

まず①について考えよう。日本人学生にとっては単位修得が必要な授業時間の一部が交流にあてられていた。そのため、授業への出席が交流会への出席にもつながっていたのに対し、ベトナム人学生は授業外の時間であり、自らスケジュール管理をしなくてはならなかった。そうした状況の中、交流日時が一定ではなかったということも、ベトナム人学生が参加しにくい状況を作っていたと考えられる。仮に交流が双方の授業内に行われれば、参加率は自然に上がると予測されるが、現実的には、双方の授業内に交流するのは難しい。それは、時差があったり、時間割のシステムが異なったりするからである。一方あるいは双方が授業外（加えて、通常の時間割とは異なる時間に変更して授業内実施とする場合も含めて）となる場合には、曜日や時間などを一定にしたり、実施は授業時間外であっても、交流を授業に紐づけて、参加態度や成果物を成績・評価に組み込んだりすることで、より積極的な参加を促すことができると考える。

次に②について考えよう。本交流には日本側教員である本稿執筆者が参加していたのに対し、ベトナム側の教員は参加していなかった。日本人学生にとっては、所属する大学の教員の存在が交流会への積極的な参加を促すことにつながったと考えられる。しかし、ベトナム人学生に対しては同様の効果は得られなかったとみられる。実際に、グループワーク時に本稿執筆者に対して質問などをしてきたのは全て日本人学生であり、ベトナム人学生が尋ねてくることはなかった。課題について疑問に思ったり、進め方についてアドバイスが欲しいと感じたりした際に、即座に尋ねられる身近な人物が交流会に参加していた方が、ベトナム人学生にとってより参加しやすかったのではないかと考えられる。双方の学生と関わりのある人物がコーディネーターになるのでなければ、双方の教員が一回ではなくとも一交流に参加する仕組みの方が、参加者にとっては課題に取り組み易くなり、より積極的な参加につながると考えられる。

### 5-3 本交流の問題点と今後の課題

ここまで述べたことを踏まえ、表4-1、4-2を見てみよう。本交流は難易度の点では、やや高めの難易度の交流であったと言える。達成感を得られるという点では、ある程度難しいと感じる交流を策定することには意味があると考えられる。しかし、その場合には、高難度の交流を支え

る条件を整えることが欠かせない。しかし、それが不十分であったことが、交流継続を難しくしたのだと考える。難易度の高い交流には、それを支えるに足る要素を合わせる必要があり、また交流を支える諸条件を整えられない場合には、難易度を下げた交流にする必要がある。

## 6. おわりに

海外在住の日本語学習者は、日本語学習のためにネイティブスピーカーとの交流に積極的であろうという安易な考えだけでは、オンライン交流を一定期間継続させることはできない。この教訓を得て、オンライン交流における正の効果・成果だけでなく、あえて負の側面にも焦点を当てることで、オンライン交流策定において考慮すべきことをまとめた。今回述べたこと以外にも、交流相手によっては、例えば時差が大きい場合の開催時間など、さらに考慮すべき事柄もあるだろう。

オンライン交流は、以前のように海外との往来が可能になっても、必要とされ実施されるのではないかと考える。本稿が、海外との交流について考える一助となれば幸いである<sup>13</sup>。

---

<sup>13</sup> 本稿が示した交流策定の枠組みは、対面交流においても生かされる。例えば、短期交換留学プログラムなどで受け入れた学生の指導・評価について、受け入れ側が全てを負うのではなく、送り出した側もオンラインで定期的に指導をしたり、最後の成果発表の場に加わったりすることで、より質の高い学びにつながるのではないかと考える。

【参考文献】

- 植田栄子（2016）「多文化共生時代に必要な異文化コミュニケーション能力の考察：インターネット（スカイプ）による日本語のオンライン交流」『青森公立大学論纂』2-1
- 大塚駿・遠藤雅伸（2019）「デジタルゲームにおける難易度と達成感の感じ方に関する研究」『エンタテインメントコンピューティングシンポジウム2019論文集』
- 岡田龍太郎（2021）「オンライン授業支援研究 大学でのインフォーマルなオンライン交流会の試み－「夜ふかしRemo会」の開催－」『Musashino University Smart Intelligence Center紀要』2
- 小林幸江・何美玲（2014）「Skypeを使った日本語教育の授業の試み－中国福州大学との協働実践－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40
- 今悠恭・小森雄太・松浦康之（2021）「オンライン交流を通じた外国語および外国文化の学習意欲向上に関する基礎的研究－岐阜市立女子短期大学とプリンス・オブ・ソクラー大学による取り組みを事例にして－」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』70
- 齋藤郁恵（2016）「日本人とのオンライン交流が海外日本語学習者に与える影響－中国内陸部で学ぶ大学生の動機づけの変化から－」『南山言語科学』11
- 中俣尚己（2016）「日本語学だからこそできる国際交流－Skypeを利用した日中合同演習授業」『日本語学の教え方－教育の意義と実践』くろしお出版
- 嶺岸玲子（2009）「Skypeを用いた会話セッションの試み－日本語学習と日本語教育実習の観点から－」『日本語教育方法研究会誌』16-1
- 若林尚樹・佐竹希里・政倉祐子（2020）「動物園ワークショップにおける「やってみる」工程の比較分析」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』67
- M.チクセントミハイ（著）、大森弘（監訳）（2010）『フロー体験入門－楽しみと創造の心理学』世界思想社

謝辞：追手門学院大学とハノイ国家大学外国語大学のオンライン交流会は、ハノイ国家大学外国語大学 Dao Thi Nga My 先生と追手門学院大学筒井由起乃先生のご尽力で実現しました。また、追手門学院大学国際教養学部松宮新吾学部長はじめ、教務課国際教養学部係の皆さまにもご協力いただきました。そして、何よりも交流会に参加してくれた両大学の学生諸子のおかげで、新しい試みにチャレンジできました。記して感謝申し上げます。なお本稿における誤りは全て本稿執筆者の責に帰するものであります。

資料：2020年度 秋学期 ハノイ国家大学・追手門学院大学 オンラインプロジェクト  
アンケート結果（2021年2～3月実施）

■回答者：18名

【内訳】

| ベトナム人学生 | 日本人学生 | グループ |    |    |    |    |
|---------|-------|------|----|----|----|----|
|         |       | 1    | 2  | 3  | 4  | 5  |
| 10名     | 8名    | 5名   | 3名 | 3名 | 4名 | 3名 |
| 18名     |       | 18名  |    |    |    |    |

■5つの動画のうち、最もよかったもの、またそれを選んだ理由は？

1位：ベトナムと日本の昼食（6名）

2位：ベトナムと日本の通学・ベトナムと日本の大学祭（各4名）

4位：ベトナムと日本の行事・ベトナムと日本のおやつ（各2名）

・場所を移動する際に早送りして流して、短くしつつ説明をしていた点や、長すぎず短すぎないのに内容がよく伝わってきたからです。

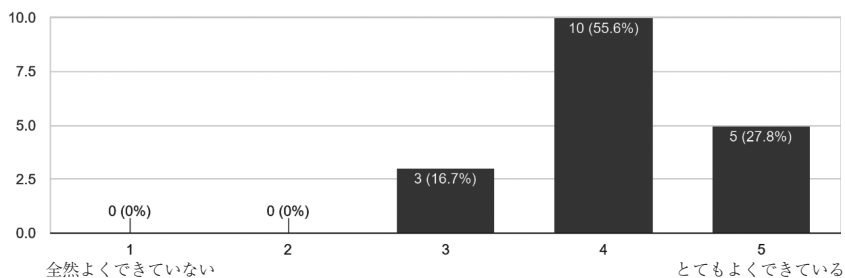
・見やすい再生時間で、ベトナム・日本両方の実際にご飯を食べに行く様子を見ることができ、加えて様々な昼食の例を写真で見せてくれたので、どのような食事をしているのか食文化の違いも学べたところです。

- ・動画が見やすく、見ていて分かりやすいと感じたから。
- ・動画や写真が多く、日本とベトナムの違いがわかりやすかったです。1 番見応えがありました。
- ・動画が綺麗、内容も面白い
- ・学生なので、学生に関するテーマをシェアしたいと思います。ベトナムと日本の大学祭というテーマを選びました。
- ・学生の生活に近いです。
- ・ベトナムと日本の通学風景の違いがよくわかったし、見ていてとても面白かったから。ベトナムの生徒と日本の生徒全員が参加していることが動画からわかったから。
- ・ベトナムと日本の昼食は面白くて人気があるトピックだと思います。
- ・大学祭についての情報を知りたいと思いますから、このビデオに興味があります。内容は 分かりやすく、大学祭の写真とビデオが豊富ですから、面白いと考えます。
- ・コロナという今しかない話題にも触れつつ日本とベトナムの文化祭を比較していたから
- ・ベトナムと日本の文化祭を調べたいです。
- ・一番目のよかった点は、発表者の声は素晴らしいです。さらに、ベトナムと日本の通学の動画の内容は分かりやすく、かわいいです。動画を撮ることはいいと思います。ベトナムと日本の通学の動画が大好きです。
- ・日本とベトナムの比較がよく出来ていてわかりやすかったことと、感情が豊かでとても聞きやすかったからです。

#### ■作成した動画に対する評価

あなたの作った動画はどうか。

18 件の回答



- ・紹介した料理はとっても美味しそうです。みんなが詳しく自分の国の昼食を紹介しました。この動画には写真がたくさんあります。
- ・私たちのグループの動画の内容は知識が多くて、分かりやすいです。さらにイラストと写真は面白いです。
- ・写真や映像を多く取り入れたことでどのような催し物が行われているのか一目でわかりやすいところが良い点だと思います。改善点としては、字幕・動画のスピードとナレーションが合っていないので、もっと早い段階からナレーションにおいて指示できていればより見やすい動画になっていたかなと思います。
- ・動画の資料はビデオが多くなったら、動画がもっとキビキビします。
- ・文章が聞き取りやすかったところが良かったと思いました。改善点は、先生の日の写真をもっと増やしても良かったのかなと思いました。
- ・画像や字が大きくて見やすいところは良かったと思います。あとは不慣れながらもグループで協力して完成できたところが良かった点です。改善点は、写真の数が多く用意できなかったことと、ナレーションの内容が薄かったところでした。
- ・良かったところは、あまり加工にこだわらず、動画を繋げることで映像が見やすく感じる点とところでした。改善点は、他のグループに比べてナレーションが簡潔すぎたところだと感じました。
- ・日本語の言葉遣いや、ナレーションの入れ方から、全員が一致団結し、完成させたことが伝わる動画になったと思います。そこが1 番良かった点です。また、日本の通学風景を作成する時に、実際にベトナムの仲間動画の感想を聞き、ナレーションに付け加えたことで、日本から見た日本の紹介だけでなく、ベトナムの仲間からの視点で日本を伝えることが出来たのもとても良かったです。改善点は、なぜかベトナムの動画の字幕が見れないことと、完成するのに時間がかかりすぎた事です。
- ・私たちのグループの動画は通学について話します。殆どの材料は私たちの自分で取りました。これは一番良かったところ

## オンライン交流の課題

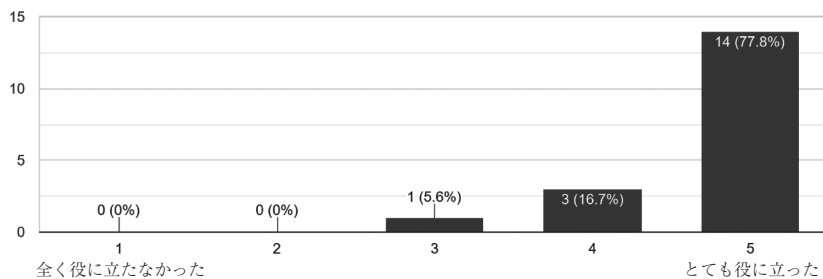
だと思います。そしてもっと改善のチャンスがあったら、動画のオープニングを足したいと思います。

- ・その日は天気が良くなかったので、動画の質を改善したいと思います。そして、人が多かったという理由で詳しく説明できなくて残念です。でも、日本人の皆さんが素敵な動画を編集してもらって、うれしいです。
- ・伝えたい内容は動画に表されました。ただ、動画をプロに作りたいと思います
- ・もう少しお互いの言語について学んでから動画を作れば良かったのではないかなと思う
- ・良かったところ：動画が自然、セリフが長くない 改善点：一頭的なのは少ない、字幕も足りない
- ・音のことがあまりはっきりしてないと思う。
- ・映像に音声を付けることが難しく、最終的に先生に編集していただいたので、最後まで自分達の動画に責任を持ちたいと思った。

### ■相互の文化学習に役立ったか？

このプロジェクトは、日本orベトナムの文化を学ぶのに役に立ちましたか。

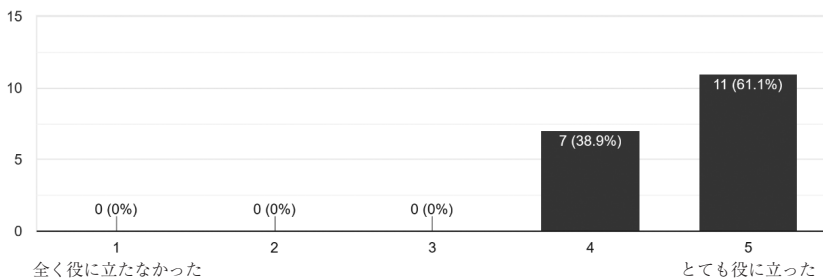
18件の回答



### ■日本語・やさしい日本語の学習に役立ったか

このプロジェクトは、「日本語」or「やさしい日本語」を学ぶのに役に立ちましたか。

18件の回答



### ■日本語・やさしい日本語の学習に役立つプロジェクトとは

- ・今回のような、交流をして、学生同士でお互いの国について伝え合うような実践的なプロジェクト
- ・交流会
- ・今回のように実際にベトナムの生徒と何かを作るプロジェクトは、コミュニケーションの中から日本語を考えることができるのでいいと思う。
- ・今回のように母国語が日本語以外の言語の人と一緒に何かを作り上げていくプロジェクト
- ・今回のように、動画を作成するプロジェクトも役に立ちましたが、動画の編集に携われる人間に限られてしまうので、全員で協力して完成させるということが難しかったです。その点では、動画作成ではなく、プレゼン大会という形にしてもいいのではないかと思います。
- ・「やさしい日本語」だと思います。
- ・今回のプログラムのような、直接日本語学習者また日本語ネイティブがお互いに話し合う機会はとても役立つと思います

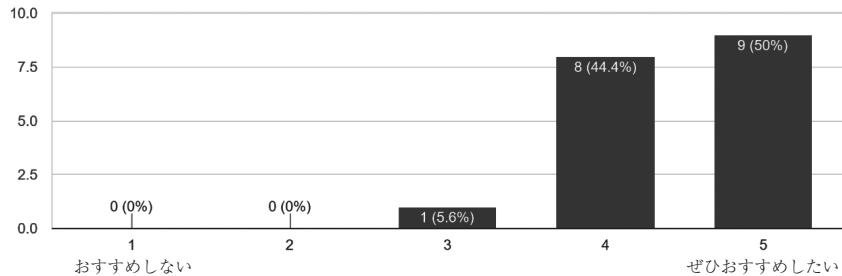
す。

- ・よく会話すべきのタイプのプロジェクトと思います。
- ・日本語を勉強している人と直接会話をするプロジェクト
- ・このプロジェクトが「日本語」or「やさしい日本語」を学ぶのに役に立つと思います。
- ・動画の脚本を相談して、色々な日本語の会話が練習できました。
- ・テーマの語彙について勉強になった。
- ・生活の場合により日本語を使える
- ・ベトナムと日本の大学祭だと思います

■同様のプロジェクトを友人や後輩に勧めたい

また同じプロジェクトがあれば、友達や後輩におすすめしたいですか。

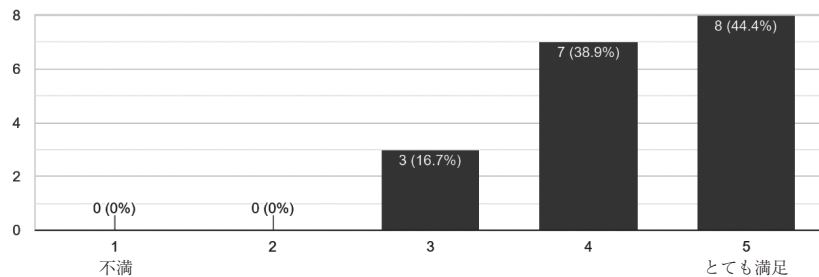
18件の回答



■プロジェクトに対する満足度

このプロジェクトに満足していますか

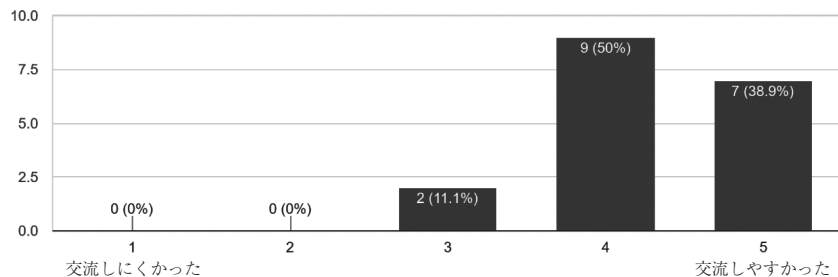
18件の回答



■交流のしやすさ

日本人orベトナム人の学生との交流はしやすかったですか

18件の回答



## オンライン交流の課題

### ■交流しやすいと考える方法

- ・直接会うのが1番だと思いました。
- ・対面で会えるのが1番交流しやすいと思います。
- ・直面し交流することのほうが便利だと思います。
- ・対面
- ・私たちのグループはLineで交流しました。Lineがひとつの交流しやすい方法だと思います。
- ・今回のように、授業内で時間が確保されていると取り組みやすいと思う。Zoomなどで相手の顔が見えるほうが交流しやすいと思う。
- ・チームワークだと主に話す人が決まってしまうということがあったので、日本語学習者と追大生のペアワークにすると、ムラがなくお互いに学べ、交流しやすいのではないかと思います。
- ・意見を伝える前に、他人の意見を聞いた方がいいと思います
- ・それぞれの人が自分の意見を話して、それから集める。
- ・タイムテーブル、タイムスケジュールをもう少し具体的に組むと交流しやすくなったと思います。
- ・ゲームも含まれたほうがいい
- ・実際に会って話すことは難しいので、ネットを通しての会話（LINEやzoomなど）お互いに人見知りをする事無く、積極的にコミュニケーションを取っていくのが1番良いのではないかと思います。
- ・ベトナムの子たちの日本語能力のせいで、言語は問題です。そして、お互いに話せると理解できるために、安房ゆる方法を調べました。例えばこの語彙を知らない場合には写真やボディランゲージを使うことができます。

### ■プロジェクトの感想

- ・オンラインということもあって、集まるのに時間がかかったり、動作が伝わりにくくて苦労したりした部分も多かったし、連絡がなかなか取れずにこまったこともあったけど異文化交流ができて、とても楽しかったです。ほかの班は自分達とは全然違う動画を作り上げていたので、その動画を鑑賞するのもとても面白かったです。
- ・大変なこともありました。協力しあって一つの動画が完成した時、達成感がありました。また、お互いの国の事情や興味があることなどを沢山知れて面白かったです。
- ・動画づくりを通じてベトナムのことを知ることができただけでなく、相手に伝わりやすい日本語の文章にするためにはどうすればいいのかを考えるようになり、多くのことを学ぶことができた。
- ・ベトナムのことを知ることが出来たし、ベトナムについてや異文化交流について興味をもつきっかけとなったので、今回のプロジェクトは良い経験となったと感じました。
- ・日頃の授業とは違い実際にベトナムの方と話すことで相手にどのように伝えればより難しい日本語を簡単に伝えられるのか学ぶことができた。また相手の性格や文化を理解してコミュニケーションをすることが大切なのだと気づいた。
- ・オンラインでの交流で、一緒に動画を作成するというのは、とても新しい交流の仕方だと思います。不慣れなことも多く、うまくいかなかった部分もありましたが、その分、もう一度チャレンジしてみたいという気持ちもあります。離れていても、このような形で交流ができるのはとても素晴らしいことだと思いますし、貴重な経験ができたと感じています。
- ・大学のプログラムで日本語学習者と話す機会が少ないのでとても貴重な経験となりました。日本語を教える技術は勉強で学べますが、日本語学習者にとってわかりやすい「やさしい日本語」で話すことは、実際に経験してみないと出来ない・学べないことなので、学内でこのようなプロジェクトが今後またあれば、参加してみたいと思いました。
- ・プロジェクトの目標は素晴らしいと思います。日本の文化についての知識に限らず、日本語の知識もよく学びました。そして追手門学院大学のみんなはすごく親切で、いつも私たちに手伝ってくれて、本当に感謝しています。
- ・このプロジェクトはとっても面白いです。色々なことを勉強になりました。日本人の友達が出来てよかったです。日本人の学生たちは優しく可愛いです。
- ・私はこのプロジェクトで素晴らしい経験をしました。まず、かわいい日本人と友達になりました。私たちは一緒に一生懸命働いた。さらに、日本文化について学ぶ機会があります。最後に、チームワークスキル、動画を撮るスキル、日本語スキルを練習の機会があります。私はこのプロジェクトが本当に好きです。
- ・いい思い出になります。
- ・プロジェクトのために新しく優しい友達ができた。日本に住んでいたときわからなかった面白い点も気がついて日本をもっと深く理解できる。
- ・日本とベトナムの大学祭というテーマは満足に表れました。友達のサポートでありがとうございます
- ・私は会話する時に自信ができました。